❖俳句（一）❖　―春夏秋冬―

宮蛍

一茶ほど出がらしなりき寝正月
大旦もはや呆れるならず爺
鏡餅据われるほどの我（わ）を願ふ
日向ぼこ大寒とても暖かり
早春の光のしじま窓に揺れ
白梅と法被が競ふ湯島かな
湯島来てお蔦・力の太鼓聞く
一分咲き御衣（おんぞ）開け初むよしのかな
花景を黄金分割の人の列
せせらぎと花のこゑ聞けここ彼岸
初燕ありのすさびを衝きくれし
朗々と五月のバラをあが歌ふ
さみだれに咲くを夢見る四葩の芽
雨脚の筆のくはしさあじさい絵
半夏生むべ毒ほどに梅雨の蒸し
沢登りこの無上なる宮上り
鉄の馬駆りて陸路の日和かな
人旧りて午睡に霞む吉井路や
ぬばたまの世映す火や線香花火
打ち終わり花火の煙いち黒く
蜩や女心をせつに鳴く

白百合のかうべ垂れては清楚かな

峰雲やあちらこちらに城のあり

ミニショップいづくにありやソフト恋

エアコンを持たぬ苦行や阿羅漢に

猛暑尽われ来たれりと赤トンボ

秋されば クーラー買ひぬ思ひかな

虫の音を楽しんでゐる虫嫌ひ

秋の夜に妹がりやらぬ一人居士

中秋の名月駆くる日本狼（ほろびしもの）

秋風の楚に吹かれつつ霊柩車（くるま）発つ

コスモスの野辺の送りや車発つ

劉生の切妻うつしに歩みをり

橘のかほりゆかしき夢を見ぬ

目につくは落ちてばかりの椿なり

北風が笛吹き鳴らす鉄の橋

落ち椿（写真ＡＣ様より借用）

♠俳句（二）♠ ―シリアス―

宮蛍

非人たれ何の甲斐なき俳諧師
精衛の一木ならぬ一句投げ
句畑を利害好悪で荒畑（あらすた）す
村境これより部落さらに我
貧老のあらぬ余生を過ぐしつつ
晩節をいかにひねるも死神や
五欲も身体死ぬるも身体
肉体の門とは死出の際
歯車が見えて来そうな河童時
椿ごと鮮しきままに藤圭子

魂鎮む今琵琶法師に首藤久美子
幻舟は恩義わすれず父と舞い
故郷やこまどり姉妹や浅草や
天神やお蔦つれかね梅いちりん
貧老は我が身相手のサバイバル
本牧や炎天大王下老苦力
ふらここやタラップ上れぬ老苦力
職階は最低なりき老苦力
外つ国のマドロス笑ふ老苦力
職辞せばば釣瓶落としの貧老や
いとやすく若者たちの「死ね」と云う
鏡面に八時二十分の顔を見る

我ならで他人を襲うカラスよし
悪者をつくりて鎧う憂き世かな
フレディの十三番街か今社会
末世鬼ひとの眠りも臍と見て
人不幸わらい飛ばせる悪聖（わるひじり）
宙（おおぞら）に生れし嘲笑サタンかな
冷厳の世に吹かれては達磨する
うつろの陽かべに見つつはゴドーする
霊視世に逆らい行けば村八分
プータがり夜廻り爺らの拍子木や
悪中に我のみ置かれて実存や
猖獗の蛇の館に入りカエル

悪禅定自縛大師の解しかな
白梅の清楚にほどけ頑（かたくな）を
ヘルパーや年端も行かぬ光の娘（こ）
九階の病窓訪なう鳩ありぬ
生き死にのオペさえ涼し異邦人
名乗り世に　回向返照　月尊（とうと）
またの世の早乙女拝む夕日かな
聾唖者の手話と身振りの演歌聞く
符号なりものことなべて我をさえ
冗談のような隕石騒動
異星から転生しても日本人
捨て犬の半狼風のすがりかな

川づつみシャドウに励む若い人

この孔子もはや止めぬ老子あり

おのずからサザエ煮適う名器持ち

白ワイン梨によく合う人よ召せ

海亀の涙は知らぬ稀馳走

文子島天井やもりをみてゐたり

世は苦し蜜柑歌いて札巡り

またの世の早乙女拝む夕日かな　（ＰＩＸＡＢＯＹ様より借用）